2.2.4. 宮古島市立狩俣小学校における総合的な学習の時間カリキュラムづくり

取組B④

宮古島市立狩俣小学校における総合的な学習の時間カリキュラムづくり

プロジェクトの実施スタッフ

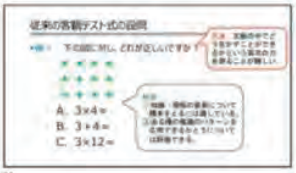
・山口剛史（教育実践学専修）・鄭谷心（教育実践学専修）
・村吉博勝（狩俣小学校　校長）・下地佑弥（狩俣小学校　研究主任）

プロジェクトの概要とねらい

宮古島市立狩俣小学校では、これまで地域素材を生かした総合的な学習の時間のカリキュラムづくりをすすめてきた。今回、カリキュラムをもう一度子どもの学びの視点から見直し、総合的な学習時間について改善をはかるために本企画を実施する。カリキュラムの見直しでは、教員が子どもの実態に即した評価基準を明確にすることをポイントとする。

実習／研修の概要（スケジュール）

月日	実施内容
研修前	実施打ち合わせ
7月27日(木)	校内研修において、総合的な学習の時間ワークショップ
研修後	狩俣小学校にて、総合的な学習の時間の中で実践



ワークショップのポイントは育みたい資質・能力を明確にし、パフォーマンス評価を活かすための基準作りでした。

2.2.4. 宮古島市立狩俣小学校における総合的な学習の時間カリキュラムづくり

実習／研修後をうけての教員の感想

研修を終えて、学校では総合的な学習の時間を見直していくことになりました。そこでは以下のような声があがっている。

・今年度のカリキュラムには入れ込めなかったが、ルーブリック作りの活動を次年度、子どもたちと作ってみたい。

・評価を子どもたちと作りつつ、教職員側では、総合を通して育てたい資質・能力の系統表のようなものを次年度作成する取り組みを計画中である。

プロジェクトの成果

・離島へき地の小学校では、その豊かな自然環境、地域の積極的な協力の中で、たくさんの体験活動があり、子どもたちは豊かに学んでいる。しかし、体験しさまざまな作品づくりはしているものの、具体的にその作品の評価方法、また毎年同じような体験になり、子どもたちの学習活動の目標設定が曖昧になることがある。今回の研修において、学習のねらい（子どもたちにつけたい力）とそれに到達するための評価方法を明確にするカリキュラムづくりのヒントを得ることができた。

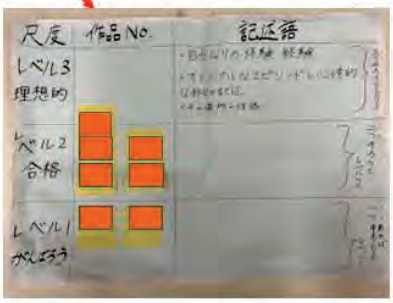
プロジェクトの課題

・今回、実際にカリキュラム作成まで完成させることはできなかった。教育計画を子どもの実態に即して協働でつくりあげる時間が必要。

・また、サイクルとして、実践的な検証まで看取ることはできなかった。カリキュラムの改善がどのような効果をもたらしたのかという点に、今後協働ができればよりよい研修のサイクルとなる。

実習／研修期間の様子

先生たちが実際に子どもの姿から作成したもの（■には、実際の子どもの名前が入ります）



ワークショップでは、子どもたちのこれまでの作品を価値づけ、そこから評価基準づくりをすすめました。子どもたちの具体的な表現を価値づけていくことで、教師がパフォーマンス課題においても、何をねらいとして設定し、どのような手立てが必要になり、何を評価していくのかを具体的に考えられるようにしました。

2.2.5. 石垣市教育委員会との連携協定に基づく、「石垣市学力向上フロンティア教育推進事業」の授業づくりの協働

取組B⑤

石垣市教育委員会との連携協定に基づく、「石垣市学力向上フロンティア教育推進事業」の授業づくりの協働

プロジェクトの実施スタッフ

・山口剛史（教育実践学専修）・村上呂里（国語教育専修）・城間吉貴（教育実践学専修）・上原太郎（石垣市教育委員会学校教育課　課長）・伊波勇史（石垣市教育委員会学校教育課　指導主事）・西表知彦（石垣市教育委員会学校教育課　指導主事）

プロジェクトの概要とねらい

これまでの八島小学校、大浜中学校との共同研究の成果を踏まえ、これから石垣市管内で核となっていく若手教員の授業力向上のため本事業を立ち上げ、琉球大学教育学部の教員との協働での授業づくりをすすめることとなった。具体的には、管内から10人程度の教員を研究員として委嘱し、それぞれが授業づくりを実施し、必要に応じて学校教員の相談相手、授業づくりの支援を大学教員が行うとりくみである。

実習／研修の概要（スケジュール）

琉球大学教員がかかわった主な検証授業・とりくみ

月日	実施内容
研修前	教育学部と石垣市教育委員会との連携推進会議で計画作成
6月5日(月)	委任状交付・研究員オリエンテーション（山口講話で参加）
8月24日(木)	小・中学校理科における地学単元教材研究FW（山口・城間）
9月29日（金）	小・中理科（大浜中・八島小）の検証授業参加（山口・城間）
10月19日（木）	国語授業打ち合わせ（オンライン）（村上）
11月7日(火)	新川小学校6年社会科授業「明治時代の国づくり」（山口）
11月8日(水)	大浜中学校1年理科授業「大地の変化」（城間・山口）
11月16日(木)	八島小学校6年理科授業「土地のつくり」（城間）
12月1日(金)	平真小学校6年社会科授業「近代国家をめざして」（山口）
2月20日（火）	終了研修（予定）

2.2.5. 石垣市教育委員会との連携協定に基づく、「石垣市学力向上フロンティア教育推進事業」の授業づくりの協働

研修の実際と研究員・担当指導主事の声

ここでは、大学教員と研究員、教育委員会が連携により教材開発を行った事例について紹介する。今回は理科と社会科の授業開発を中心に関わったが、ここでは理科の教材開発・単元づくりについて報告する。

【小中理科をつらぬく地学単元の構想】

今回、小学校・中学校の連続性も考慮し、地学単元を具体的に「石垣島の成り立ち」から構想することとした。単元づくりをすすめるために、実際に石垣島の成り立ちがわかる地域の調査を実施し基本的な岩石を収集した。具体的教材として、生徒に提示する岩石を選定し、島の成り立ちを具体的に岩石から考えていく教材とした。なお岩石採取については管理者の許可を得て実施している。

石垣島は石灰岩だけではなく、火成岩やさまざまな堆積岩層を持つ島である。その多様性を岩石収集を通じて確認していった。

研修の実際と研究員・担当指導主事の声

【検証授業の実際】

池田亘教諭（大浜中学校）
公開授業では、「石垣島で採取された岩石のつくりを観察し、石垣島の地質の多様性に気づかせるような本単元の導入を行い、本単元における学習意欲の向上を図るとともに、主体的に取り組む学習者の育成」を目指し、ICT機器を効果的に活用し研究テーマに迫ることができるよう授業構成を行うことができた。

金城淳教諭（八島小学校）
フィールドワークで準備していただいた実物を活用したことで、子ども達の興味・関心が高まった。

2.2.5. 石垣市教育委員会との連携協定に基づく、「石垣市学力向上フロンティア教育推進事業」の授業づくりの協働

研修の実際と研究員・担当指導主事の声

【本取り組みを受けての担当指導主事の声】
・行政の指導主事以外の専門的な指導助言を頂き、より充実した研究を展開できた。
・オンラインでつないだミニ研修や指導案検討、情報共有を時間や場所にとらわれず実施できた。現場の教諭にとってはとてもありがたかった。
・多くの教諭が苦手としている地学分野の単元において、専門的な助言を頂きながら実地調査を実施できそれらを活用し、小学校・中学校で授業が展開できた。

プロジェクトの成果

成果として、オンラインと対面の良さを生かし、日常的にはオンラインでの授業づくり相談、対面では授業研究や子どもの学びの見取りと、それぞれの特性を生かした教材開発、単元づくりが行うことができたことは、今後の協働のあり方を考えるきっかけとなった。また大学の専門性の発揮という点が、行政の指導主事だけではできない学びを生んだ。

プロジェクトの課題

課題としてあげられるのは、現場教員のニーズと大学教員のマッチングならび協働する時間の確保である。指導主事からも「授業者と各教科の教授とのスケジュール調整の難しさ」が指摘された。地域連携を充実させるためには、丁寧なコーディネートが重要である。

研修・授業の様子

研究員の先生方と実際に授業を一緒につくり、検証授業を重ね単元における「個別最適な学び」のあり方を模索してきた。

小学校6年社会科授業の様子

社会科の授業づくりでは単元を貫く学習課題をどう設定するか、タブレットの効果的な利活用を検討してきた。

中学校1年理科授業の様子

小学校6年社会科授業の様子

理科では、具体物を使い、本物に出会うことを大事にした授業づくりをした。

小学校6年理科授業の様子

2.2.6. 石垣市教育委員との連携協定に基づく、管内教職員に対する保護者対応研修

取組B⑥

石垣市教育委員会との連携協定に基づく、管内教職員に対する保護者対応研修

プロジェクトの実施スタッフ

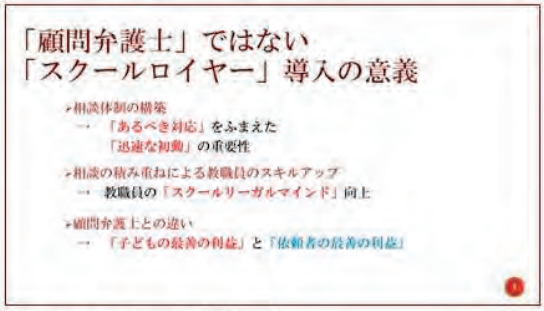
・山口剛史 （教育実践学専修）
・上原太郎（石垣市教育委員会学校教育課　課長）
・横井理人（研修会講師　附属学校スクールロイヤー　サイオン総合法律事務所）

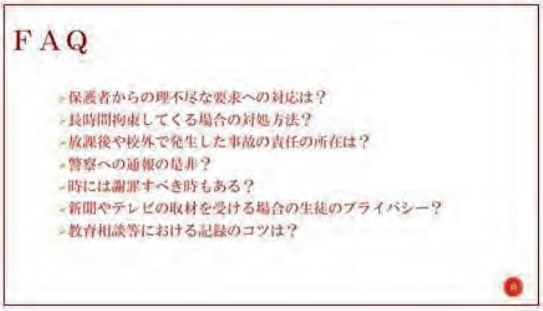
プロジェクトの概要とねらい

現在、各地で課題となっている保護者対応について、スクールロイヤーの法的な立場から、その対応方法について研修を行う。琉球大学教育学部附属学校のスクールロイヤーを担当していただいている横井理人氏に、公立学校における対応について、その考え方、そして実践的な対応方法についての研修を実施する。

実習／研修の概要（スケジュール）

月日	実施内容
研修前	研修内容打ち合わせ
8月31日(木)	市校長会における研修会
10月4日(水)	市管内の全職員向けの研修会
研修後	研修のフィードバック





当日のスライドより

2.2.6. 石垣市教育委員との連携協定に基づく、管内教職員に対する保護者対応研修

研修後の教職員アンケートより

今回の学びを、これからどのように活用していきたいか（自由記述）

・保護者との信頼関係を崩さず丁寧に対応していくが、一つ一つのことに是々非々で対応していきたい。
・職員がひとり悩む事がないよう、またそれに気づく事ができるよう、日頃から先生方とコミュニケーションをはかり、相談やグチ等何でも話せる関係づくりに努めたいです。
・講話を聞きこれからもより具体的にしっかり記録を付けていこうと感じました。多くの学びと気づきをありがとうございました。
・まずはチームで対応することを意識すること、あとは、子どもたちの最善利益を考えて、対応していきたいと考えました。

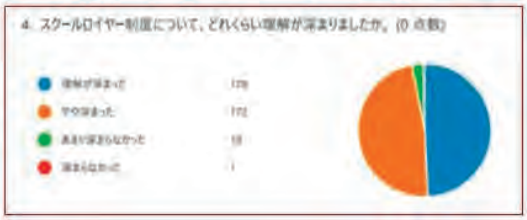
プロジェクトの成果

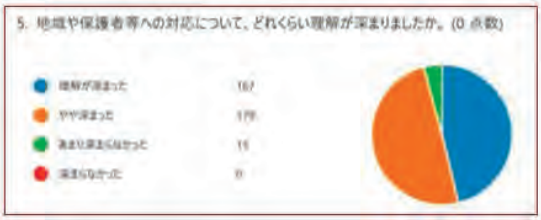
・今回、参加した教員からは、「合理性」と「是々非々」という態度で臨むこと、チームとして対応していくことなどの教員としての基本的な対応方法への気づきを書いた声が多く聞かれた。そのためのクレーム対応、保護者対応を法的観点から見直すきっかけになったことが大きな成果と言える。

プロジェクトの課題

・アンケートからは、「もっと具体的な事例を聞きたい」や、自分たちの地域にスクールロイヤーが必要でないかという声も寄せられた。研修だけでなく実際のスクールロイヤーの設置が教員の安心材料になり、今後本地域での課題となる。

その他、アンケートに寄せられた声





研修会に寄せられた学校経営・教科指導等で困っていること

ここでは、今後の研修ニーズを考えるうえで、先生方が困っていることについて紹介いたします。
・空き時間が少ない上に学年も掛け持ちしているが、業務時間内に教材研究の時間が取れない。
・不登校生徒の多さ、深刻さ。
・教材費の未納については、支払いしない保護者の対応が学年運営やなどに大きく影響している。
・保護者への連絡は担任からするべきか、その時に連絡がある担当からするべきか悩んでいます。
・質疑応答でもあったが教員が会計事務を行うことへの負担。また勤務校では教科、部活の会計簿を監査されることがないので、いつか不祥事が起こると思う。

2.2.7. トータル支援事業の研修プログラム

取組B⑦

＜トータル支援事業の研修プログラム＞ 支援を必要とする多様な子どもの 教育実践研修会と早期支援連絡会

プロジェクトの実施スタッフ

・浦崎武（琉球大学教職大学院）・上原太郎（石教委課長）・新城哲史（石教委指導主事）
・マックマイケル 留美子（竹富町教委指導主事）・玉代勢香織（八教事指導主事）
・仲地みゆき（石垣市特別支援学級設置校長会長）・吉濱剛（新栄こども園長）
・砂川雅世（石垣市子育て支援課指導主事）・鈴木陽子（うるま市立彩橋小学校）

プロジェクトの概要とねらい

石垣市教育委員会、竹富町教育委員会、与那国町教育委員会、八重山特別支援学級設置校長会、石垣市福祉部こども未来局との協定・協力、沖縄県教育委員会（八重山教育事務所）との共催により実施する。

支援を必要とする多様な子どもへの支援や教育として本プロジェクトを開催することを通して、「教育実践研修体制」および「早期支援体制」の構築をめざす。

地域における教員、支援員の実践力養成研修、実践授業、支援教室、実践事例検討会、教育相談、情報交換会の開催等のトータル支援活動を学校、関係機関等と連携・協働により実施し、「共生社会」の実現に貢献することをねらいとする。

月日	実施内容
実施スケジュール１	
①８月19日(土)	第1回トータル支援教室IN八重山（教育相談会） 石垣市教育委員会 沖縄県教育委員会（八重山教育事務所）共催
②８月20日(日)	第1回トータル支援教室IN八重山（支援教室） 石垣市教育委員会 沖縄県教育委員会（八重山教育事務所）共催
③８月21日(月)	石垣市教育委員会と石垣市子育て支援課との協働による 支援を必要とする子どもへの実践研修会 「通常の学級と特別支援学級における支援を必要とする子どもへの教育実践」　（実施情報はQRコード参照）
④８月22日(火)	石垣市内小学校の特別支援教育支援員の巡回相談
⑤８月23日(水)	石垣市教育委員会との協働の特別支援教育の支援員研修会 （実施情報はQRコード参照）

2.2.7. トータル支援事業の研修プログラム

2.2.7.　トータル支援事業の研修プログラム

第１回　トータル支援教室の様子【②８月２０日（日）】

活動名「ロケット風船であそぼう！」

ビニールの傘袋に好きな絵を描いて、楽しく飛ばしたりキャッチし合い、他者との関わりをもったり、やりとりしたりしました。

活動後には、参加した保護者と共に、子どもの様子についてのふり返りを行いました。
普段の様子との違いや子どもとの関わりかたなど、実践を通した学びの場になりました。

研修プログラムの様子【③８月２１日(月）】

「幼児教育と小学校教育をつなぐ実践」
（吉濱剛・塩川由貴乃）

通常の学級における共に学ぶ授業実践
～子どもの主体性を引き出す工夫と自立活動の視点を取り入れて～（鈴木陽子）

子どもの“楽しみ”からつくる自立活動と教科学習の実践（浦崎武）

2.2.7.　トータル支援事業の研修プログラム

月日	実施内容
実施スケジュール２	
⑥９月７日(木)	竹富町の特別支援教育の支援員研修会 （実施情報はQRコード参照）
⑦９月８日(金)	石垣市内小学校への巡回支援相談
⑧９月９日(土)	石垣市内公立こども園への巡回支援相談
実施スケジュール３	
⑨11月10日（金）	石垣市教育委員会との自律支援サポーターの研修会 （実施情報はQRコード参照）
⑩11月25日（土）	第２回トータル支援教室IN八重山（支援教室） 石垣市教育委員会 沖縄県教育委員会（八重山教育事務所）共催 （チラシはQRコード参照）
⑪12月21日（木）	石垣市の特別支援教育の支援員研修会 （実施情報はQRコード参照）

第２回トータル支援教室の様子【⑩１１月２５日（土）】

活動名「カルタをつくって　カルタ大会！」

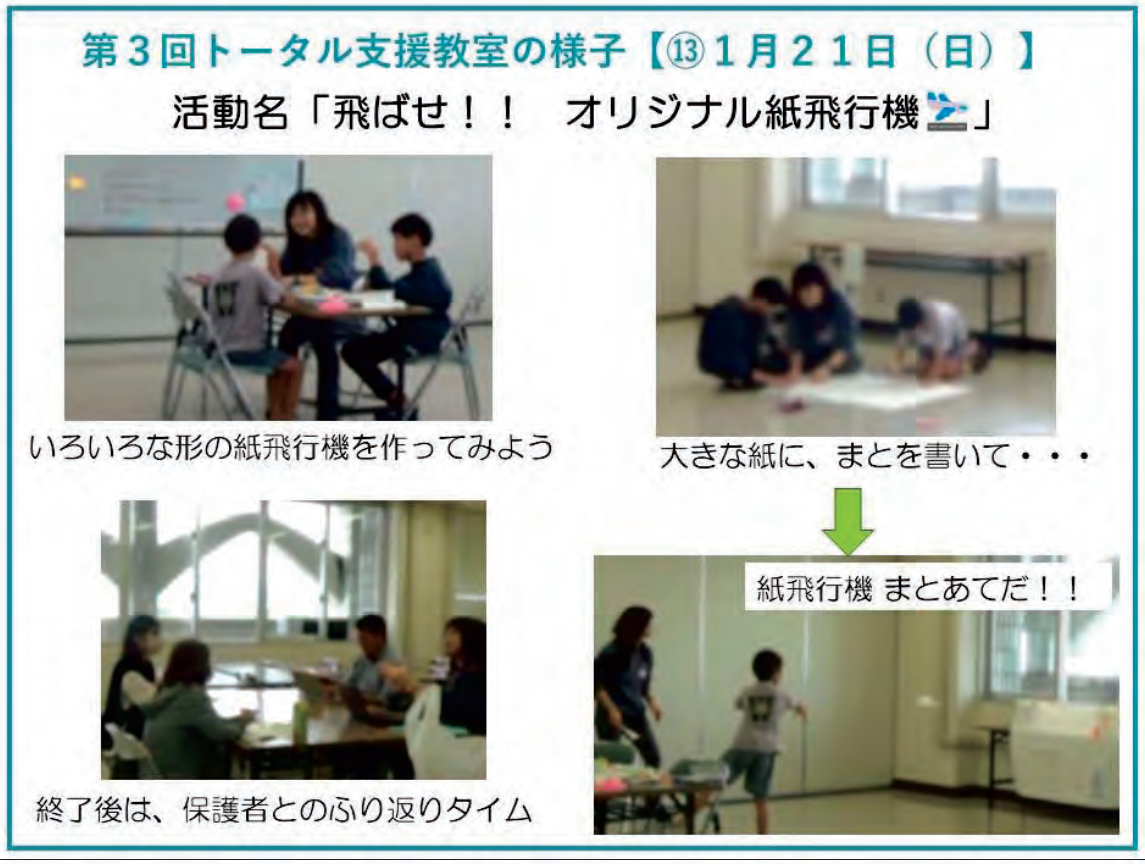
オリジナルかるたをつくろう

作ったかるたで、カルタ大会！

共に支援者として関わった特別支援学級担任と、学級の児童の普段の様子や支援教室での様子や変容について、情報交換をしました。

2.2.7. トータル支援事業の研修プログラム

月日	実施内容
実施スケジュール４	
⑫１月20日（土）	第３回トータル支援教室IN八重山（教育相談会） 石垣市教育委員会 沖縄県教育委員会（八重山教育事務所）共催 （チラシはQRコード参照）
⑬１月21日（日）	第３回トータル支援教室IN八重山（支援教室） （チラシはQRコード参照）
⑭２月12日（月）	発達支援教育実践セミナー 沖縄県教育委員会の共催 「共生社会の実現に向けた多様な子どもたちの生きるかたち－
⑮２月16日（金）	石垣市教育委員会との協働による支援を必要とする子どもへの実践研修会 「通常の学級と特別支援学級における支援を必要とする子どもへの教育実践」　（実施情報はQRコード参照）
⑯２月17日（土）	石垣市教育委員会との協働による支援を必要とする子どもへの実践研修会 「通常の学級と特別支援学級における支援を必要とする子どもへの教育実践」　（実施情報はQRコード参照）



2.2.7. トータル支援事業の研修プログラム

月日	実施内容
早期支援連絡会の取り組み 1月～3月	支援を必要とする子どものトータル支援の一環として、教育委員会と子育て支援課との連携・協働により構築した早期支援連絡会（石垣市教育委員会・子育て支援課）における幼児教育施設から小学校への入学前の申し送りのサポートを行う。学校・幼児教育施設の訪問支援・相談等の取り組みを行う。（「早期支援連絡会について」や「年間の取り組みついて」はQRコード資料①、②参照）
1月下旬 **2月中旬** **3月上旬** **3月中旬**	本年度の小学校1年生の実態把握と支援の成果と課題、新年度の入学児童の実態を把握するため、各幼児教育施設から各小学校へ入学する児童の申し送りシートの作成および学校での対面による申し送りの会の開催をし受け入れ体制を整える。 １）幼児児童に対応する支援員・教員への学校適応に関する相談・助言 ２）支援を必要とする幼児児童に関する幼児教育施設と小学校との入学前後における引継ぎ等の連携支援（早期支援連絡会の連携支援） ３）新入学児の早期実態把握と早期学校支援体制づくりのサポート

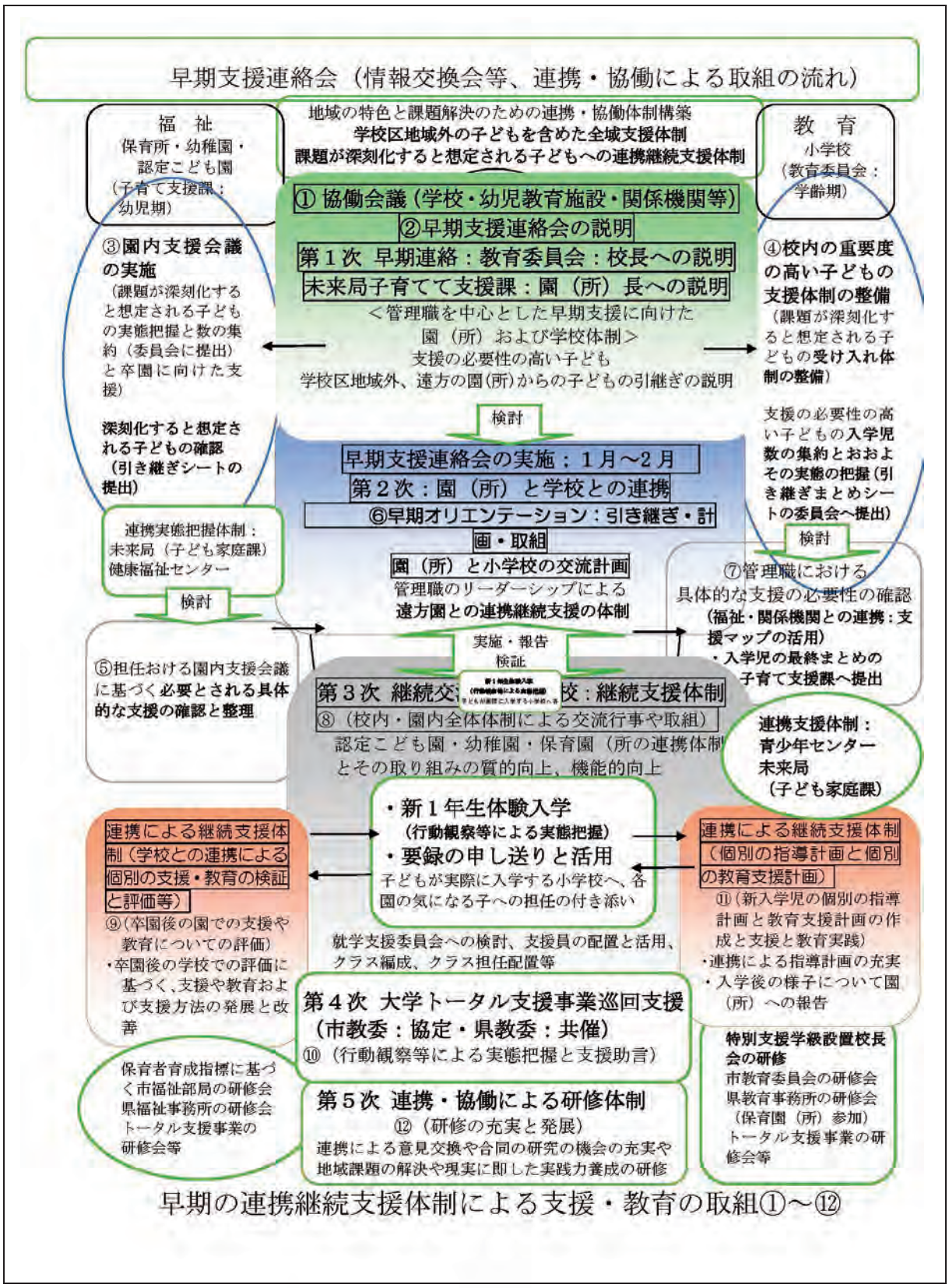
プロジェクトのねらい、成果と課題

特別支援学級の増加にともない、子どもの「実態把握」をするための情報収集のあり方や「学びの場」の適切な判断が必要である。そのための早期からの情報収集や支援体制の整備（早期支援連絡会の取り組み）が重要であることを再確認することができた。（「早期支援連絡会の連携・協働による取り組みの流れ」は次ページのポンチ図を参照）

特別支援学級の教員や支援員に加え、通常の学級の担任の先生を対象とする「インクルーシブ教育」の視点を踏まえた内容の研修を重視した。研修を通して、通常の学級での授業が支援を必要とする多様な子どもが「参加」したくなる授業づくりのあり方を伝えた。今後の重要なテーマとなる研修を実施できたことを成果として考える。（「通常の学級のなかの支援を必要とする多様な児童生徒への教育実践研修」の資料はQRコード資料③を参照）

子どもの実態把握や支援・教育を踏まえて「インクルーシブ教育」の視点からの教育実践や授業づくりの研修が必要である。特に交流学級（通常の学級）の担任の先生を対象とする研修が少ないことが課題となっている。今後、特別支援学級の増加にともない「早期支援連絡会の取組の活性化」と「学びの機会」を提供する「学びの場づくり」が必要である。

2.2.7. トータル支援事業の研修プログラム



2.2.7. トータル支援事業の研修プログラム

「学びの機会」を提供する「学びの場づくり」
今後の課題と体制づくり

離島地域の特別支援学級では、対象児の増加による学級数の増加や教員の不足の影響を受け、臨任や新人の先生、実践経験の少ない先生が担任となり単年ごとに入れ替わる等、継続的に担任をすることができないケースが多い。そのため特別支援教育を推進するミドルリーダーの育成のための学びの継続性が途絶えてしまう傾向がある。

学校や幼児教育施設への支援を通して特別支援教育に取り組む意欲を有する人材の発掘やその人材を育成する「継続的な学びの場や機会」つくりたい。実践力向上に向けて「学び合いができる体制」を整えることをめざす。

「早期支援連絡会」の今後の課題と体制づくり

地域における実践力養成研修、実践授業、支援教室、実践事例検討会、教育相談、情報交換会の開催等のトータル支援活動を学校、関係機関等と連携・協働により実施し「共生社会」の実現に貢献する取り組みが必要である。

地域の支援の必要な子ども、学校・関係機関等の教職員、地域・家庭・保護者への支援・教育の充実、障害児・者を「早期から切れ目なく持続的、継続的に支援する体制」を整えたい。

巡回支援や相談を通して「地域や関係機関との連携・協働」による教諭、保育教諭、保育士、支援員等への「早期支援体制」を整えることをめざす。

2.2.8. 竹富町教育委員会との連携協定に基づく、保幼小連携のための研修会

取組B⑧

竹富町教育委員会との連携協定に基づく、保幼小連携のための研修会

プロジェクトの実施スタッフ

・山口剛史（教育実践学専修）
・岡花祈一郎（子ども教育開発）
・仲本英男（竹富町教育委員会主幹兼課長）
・真謝久美子（竹富町教育委員会）

プロジェクトの概要

竹富町うえはら幼稚園にて、公開保育の指導助言を行った。
午前の公開保育に参観し、その後、接続について指導助言を行った。西表島の保育者を中心に竹富町の保育者と小学校教員が参加して幼小接続のあり方について議論した。

実習／研修の概要（スケジュール）

月日	実施内容
研修前	委員会・学校・学部で立案
10月19日 10月20日	竹富町うえはら保育園にて公開保育の指導助言を行った。 ・公開保育への参観 ・接続について指導助言 ・保育者と小学校教員が参加し、幼少接続について議論した。
1月16日 1月17日	大原小学校・大原幼稚園での公開保育 参観及び指導助言

2.2.9. 竹富町教育委員会との連携協定に基づく、学生と教員の協働による「離島へき地における学習指導のあり方」に関する研修

取組B⑨

竹富町教育委員会との連携協定に基づく、学生と教員の協働による「離島へき地における学習指導のあり方」に関する研修

プロジェクトの実施スタッフ

・萩野敦子（国語教育専修）・山口剛史（教育実践学専修）
・西原智（竹富町教育委員会教育課 課長）・仲本英男（同課 主幹兼課長）
・川端修（竹富町立鳩間小中学校 校長）・照屋茂伸（同校 教頭）
・吉田湧真、糸数鞠杏、仲村仁志、仲程優凜奈（教育学部３年次）

プロジェクトの概要とねらい

教育学部の学生が実習として竹富町立鳩間小中学校の学校教育・留学生教育を体験し、そこでの課題・疑問などを職員と共有しながら、今回の取組や日々の活動をふりかえることで、学生の教育実践力を向上させるとともに、学生に関わる教員自身も離島へき地教育に求められる学校教育・学習指導のあり方を見つめ直す研修の機会とする。

実習／研修の概要（スケジュール）

月日	実施内容
研修前	委員会・学校・学部で立案。 学生の事前指導。
11月20日（月）	指導教員(萩野/翌日まで)と学生移動。 川端校長と児童の案内で島内散策。
11月21日（火）	学生、実習第１日。 児童生徒と顔合わせ。
11月22日（水）	学生、実習第２日。 放課後「つばさ寮」での交流。
11月23日（木）	祝日。指導教員合流(山口/翌日まで)。 学生、島内めぐりと島民との交流。
11月24日（金）	学生、実習第３日。 放課後「つばさ寮」での交流。
11月25日（土）	鳩間小中学校学習発表会の支援。 学生、離島。
研修後	学生の事後指導。 鳩間小中学校教職員アンケート実施。

★鳩間小中学校HP校長挨拶より★

今年度本校は(中略)小学１年生１名、３年生１名、４年生１名、６年生２名、中学校１年生１名、２年生３名、３年生２名、計11名(注)で学校がスタートしています。その内６名が鳩間島留学支援多目的施設「つばさ寮」で、集団生活をしています。親元を離れ、この鳩間を選び、留学してくる子供たちを学校職員はもちろんのこと、島全体で育てるという地域の力があります。その地域の力を積極的に活用し、社会に開かれた教育課程の実現に向け、学校と地域が協働した学校づくりを実践してまいります。

（注：転入で研修時は計13名に）

2.2.9. 竹富町教育委員会との連携協定に基づく、学生と教員の協働による「離島へき地における学習指導のあり方」に関する研修

2.2.9. 竹富町教育委員会との連携協定に基づく、学生と教員の協働による「離島へき地における学習指導のあり方」に関する研修

実習後の学生のふりかえり①

この実習の中で、私の子どもとしての理想像にピッタリな子に出会った。素直で優しくて、運動好きで周りに流されない（髪、スマホ）タイプだった。動物にも人にも優しく、年上にも気を遣えるようで、すごく好感がもてた。他の子どもも優しく素直で、海浜留学というシステムが児童を育てているように感じた。私個人的には良いとも捉えているが、果たして、これが子どもの為になっているのかという点では、考えなければいけないと思った。

県外から親元を離れて「つばさ寮」に暮らす子どもたちとの関わりの中で、子どもにとっての留学制度の是非について考察している。

これまで経験したことのない「複式学級」の参観や授業実践を通して、その利点と課題について考察している。

実習後の学生のふりかえり②

（複式学級について）学年特有の教科などを考慮して時間割を組み、別々の教室で授業を行う時もあれば、学年・内容が異なる算数を１人の教師が同時進行で進めている時もありました。このような１対１の授業を観察し、１対１であるからこそ、その子の学習の実態を把握しやすかったり、その子のペースに合わせた授業が出来たり、その子の疑問・呟きを全て拾うことが出来るところが利点だと感じました。その反面、授業中は教師と生徒だけの対話であるため、他の子の意見や考えを聞くことが出来ず、広い視点を耕すことが出来ないということが課題だと感じました。

※いずれの学生もA4用紙に一杯のふりかえりを提出したが、そこから本報告としてのポイントのみ抜粋。

実習後の学生のふりかえり③

１週間という短い期間だったが、私は「個」とのコミュニケーションを大切にした。学習支援という枠を少しだけはずし、自分の心を開いて会話をしてみた。好きなことや将来の夢、楽しいことや苦手なこと、不安を感じていることなど、沢山のことを聴くことができた。…中略…
１日という連続的な時間の関わりを通して「個」を見ることは、大切なことだが簡単ではない。離島の特別な環境で学ぶ子どもたちの姿は、すごく複雑で、それでも一生懸命にがんばって、すごく輝いていた。

他者の少ない離島で積極的に「個」同士の対話をした経験から、子どもが抱える複雑さに思い至っている。

小規模校ならではの教員の多忙感に触れつつも個々の子どもの成長を見取れる教師としてのやりがいを感じている。

実習後の学生のふりかえり④

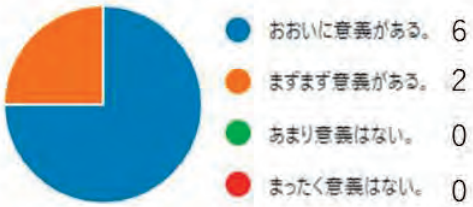
先生方の児童生徒１人１人に焦点を合わせ、個々に合わせた指導や授業づくりを常に模索している様子がとても印象に残っている。校長先生がはじめにお話し下さった「子どもたちの自己肯定感を高める」ためにはどうすればいいのかを考えてみるようになり、その大切さに気付かされる日々だった。そして、へき地・小規模校で働く先生方の多忙さを知り、離島ならではの良さだけでなく課題や難しさを痛感した。しかし、やはりこれほどまで子どもたち１人１人に目が向いている学校は、非常に魅力的だ。子どもたちの活き活きとした姿や一生懸命頑張っている姿にパワーをもらう毎日で、教師のやりがいを強く感じる１週間だった。

※いずれの学生もA4用紙に一杯のふりかえりを提出したが、そこから本報告としてのポイントのみ抜粋。

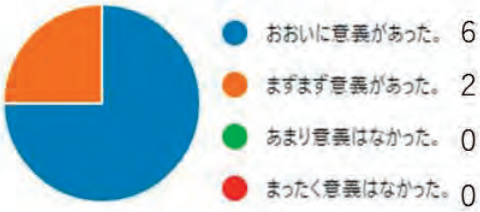
2.2.9. 竹富町教育委員会との連携協定に基づく、学生と教員の協働による「離島へき地における学習指導のあり方」に関する研修

実習／研修後の教職員アンケートより

Q：学生にとって、この実習には意義があると思うか？



Q：子どもたちにとって、学生の存在・活動に意義はあったか？



Q：教職員にとって、学生の活動から学ぶものはあったか？

本取組の「学生の実習を通して教員が研修する」というねらいに対して、学生にとっての意義と子どもたちにとっての学びや刺激については、回答した教職員全員が肯定的な回答を寄せた。

しかしながら、教職員にとっての学びについては、「おおいに」が半数に届かず「あまり」の否定的回答も２名出るなど、その有効性については十分に検証できたとは言いがたい。ただし、否定的回答の理由については自由記述欄に記載されていなかった。

実習／研修後の教職員アンケートより

「教職員にとって学ぶものがあった」に肯定的回答をした理由（自由記述）

- 学生の積極性。
- 教師になりたいという純粋な気持ちを再認識することができた。
- 子どもとの関わり方や学ぼうとする姿勢からとても刺激を受けました。
- 若さと情熱。そして子ども目線の関わりから学ぶところは大きかった。
- 学生たちの発想力が豊富なところや子どもたちとの関わり方など、学ぶべきことが多くありました。教育に対してまっすぐなところにとても感銘を受けました。うまく言葉にすることができませんが、教育に対して熱心な姿勢から刺激をいただきました。ありがとうございました。

プロジェクトの成果

- 学生にとっては、附属学校実習では体験できない沖縄の「学校」の一つの現実を知り、その「光／影」に思い巡らす機会となった。
- 上記アンケートの記述に見えるように一定の教職員は、学生の姿勢から初心を思い出したり、柔軟な発想や子どもたちとの距離感から学びを得たりする好機となった。

プロジェクトの課題

- 学生を指導することが教職員にとっても確かな学びとなるような仕掛けについては、さらに研究と検討を重ねる必要がある。
- 寮の子どもたちとの関わりから、多様な子どもの育ちを考えるためさらなる仕掛けが必要である。
- 適切な（現場/学生/大学教員の都合が折り合う）実習時期の検討。

2.2.10. 竹富町教育委員との連携協定に基づく、学校司書研修会

取組B⑩

竹富町教育委員会との連携協定に基づく、学校司書研修会

プロジェクトの実施スタッフ

・山口 剛史（琉球大学教育学部）：企画実施リーダー
・望月 道浩（琉球大学教育学部）：研修会講師
・仲本 英男（竹富町教育委員会）：教育委員会での企画調整
・安慶名 美穂子（竹富町教育委員会）：コーディネーター

プロジェクトの概要とねらい

本企画は、離島でかつ巡回で仕事を行っている竹富町管内の小中学校の学校司書が一堂に会する研修機会を保障することで、学校図書館法第6条に謳われた学校司書の資質の向上に寄与するとともに、学校図書館の運営の改善及び向上を図り、児童又は生徒及び教員による学校図書館の利用の一層の促進を図ることをねらいとするものである。今後の研修モデルを模索していくためにも、竹富町管内の学校司書による研修を実施したい。

実習／研修の概要（スケジュール）

月日	実施内容
2023年 11月27日（月）	竹富町教育委員会との研修実施へ向けた打合せ（メール）
11月28日（火） ～29日（水）	竹富町教育委員会との研修実施日程調整（メール）
2024年 1月9日（火） ～12日（金）	竹富町教育委員会との研修内容打合せ（メール）
1月25日（木） ～26日（金）	竹富町教育委員会との研修内容最終打合せ（メール）
1月29日（月）	竹富町学校司書研修会（会場：竹富町役場３階大会議室） 研修テーマ： 「学校図書館の情報センター機能を高めるために ―パスファインダーを手掛かりに考える―」

2.2.10. 竹富町教育委員との連携協定に基づく、学校司書研修会

竹富町教育委員会学校司書研修担当者との打合せより

・竹富町は複数の離島からなり、学校司書が正規専任で全校配置されているわけでなく、複数校の学校図書館を巡回により運営している場合もある。
・かならずしも経験豊かな学校司書だけないため、恒常的な研修が必要であるが、離島であるがゆえに効果的な研修を実施できていない。
・そのため、今後の研修モデルを模索していくためにも、今回竹富町管内の学校図書館司書による研修を実施したい。

プロジェクトの成果

・本プロジェクトにおける学校司書研修では、学校図書館に限らず公共図書館や大学図書館でも利活用されている情報支援ツールの１つである「パスファインダー」を取り上げた。
・「パスファインダー」として作成したものは、児童生徒への情報支援ツールとしても、提供可能である。
・「パスファインダー」は、各学校図書館で学校司書の自己研修ツールとして継続的な研修の手立てとなる。

プロジェクトの課題

・本研修のみでは、より具体的な「パスファインダー」の利活用についてまで、認識を深めてもらうには研修時間が不足していたことが挙げられる。できれば、研修内容を踏まえて実際の学校図書館現場で「パスファインダー」作成を行い、所蔵資料と照らし合わせながら検討することが望まれる。

研修会当日の様子

2.2.11. 大宜味村の学校を中心とした教育支援の研修教材化

取組B⑪

大宜味村の学校を中心とした教育支援の研修教材化

プロジェクトの実施スタッフ

- 辻雄二(教育実践学専修)・仲間伸恵(美術教育専修)
- 岡本牧子(技術教育専修)・平良智(大宜味小学校校長)
- 宮城研治(大宜味中学校校長)・倉持有希(大宜味村教育委員会)
- 宮平光二(大宜味村教育委員会)

プロジェクトの概要とねらい

大宜味村教育委員会と本学部の連携により、毎年「芭蕉紙(シークワーサー染)による卒業証書制作」、「わんぱく体験団活動への学生参加」、「琉球大学体験を通したエネルギー教育」の三つを柱とした活動を行なっている。本プロジェクトは、教育委員会や地域住民が学校を支える潤滑油として大学が連携できている好事例と考え、これまでの研究成果をもとに活動事例を教材化することで、県内教職員が離島・へき地学区で教育活動を行う際の研修材料としたい。

教育支援の概要（主なスケジュール抜粋）

月日	実施内容
5月19日（金）	わんぱく体験団 大運動会
7月1日（土）	わんぱく体験団 田嘉里川
8月17-18日（木-金）	わんぱく体験団 キャンプ
9月14-15日（木-金）	卒業証書製作　研修
12月1日（金）	琉球大学体験 小学校4年生 エネルギー教育、カフェテリア体験、風樹館見学
12月13日（水）	エネルギー教育 中学校2年生 大宜味中学校へ出前授業
12月5-18日	卒業証書製作 小学校6年生　製作指導 総合的な学習の時間
1月27日（土）	わんぱく体験団 ムーチーづくり
支援後	研修動画編集・制作

大宜味村立大宜味小学校と中学校は国頭郡大宜味村の結の浜地区に位置し、令和5年度は、それぞれ136名と76名の児童生徒が在籍しています。自然豊かな環境の中で、児童生徒たちは学問だけでなく地域文化や伝統に触れながら成長しています。小学校では基礎学力の向上に注力し、中学校では生徒一人ひとりの個性と能力を伸ばす教育を行なっています。地域との連携も密で、児童生徒が社会性や協調性を学ぶ機会も多く提供されています。両校共に小規模で、きめ細やかな教育が特色です。

2.2.11. 大宜味村の学校を中心とした教育支援の研修教材化

大宜味村教育委員会 生涯教育課 x 琉大教育学部

卒業証書製作研修

プロジェクトの概要

大宜味小学校では、大宜味産の芭蕉とシークヮーサーを利用した卒業証書製作を行なっている。材料確保や製作技術の継承を教育委員会と地域住民が継続的にサポートできるよう、大学で定期的に研修を実施している。

主なプロジェクト担当者

仲間伸恵（美術教育専修）
倉持有希（大宜味村教育委員会 生涯教育課）
地域住民の皆さん

大宜味村教育委員会 生涯教育課 x 琉大教育学部

卒業証書製作研修

シークヮーサーの葉を煮出し、染料を取ります

煮熟して柔らかくなった芭蕉

シークヮーサー染め芭蕉繊維で紙漉き

6年生へ卒業証書の製作を指導できるようになります!!

プロジェクトの成果

学校の教育活動をサポートする卒業証書製作研修を教育委員会と大学が共同で継続実施することにより、技術継承はもちろん原材料の研究開発も行うことが可能となっている。研修動画では、児童らへの製作サポートの様子もまとめている。

プロジェクトの課題

地元の人材を育成し、新たな指導者として研修に参加してもらうことで卒業証書製作サポートを持続的に行うことを目指している。

2.2.11. 大宜味村の学校を中心とした教育支援の研修教材化

大宜味村教育委員会 生涯教育課 x 琉大教育学部 学部学生

わんぱく体験団活動

プロジェクトの概要

教育委員会の生涯学習活動として取り組まれる「わんぱく体験団」に教育学部の学生が「応援団」として参加し、地域で育む体験学習の経験や教職に資する子ども理解を高めている。

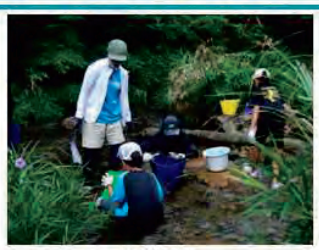
主なプロジェクト担当者

辻雄二（教育実践学専修）
倉持有希（大宜味村教育委員会 生涯教育課）
学部学生（学校教育専攻 ・北海道教育大学釧路校）

大宜味村教育委員会 生涯教育課 x 琉大教育学部 学部学生

わんぱく体験団活動

大運動会


田嘉里川

キャンプ

沖縄そばづくり

ムーチーづくり

田嘉里川

学生の振り返りアンケート(抜粋)

・この体験は偶然的に学びが生まれる場であったので、知識を結びつける力、子どもたちの気づく力、他者に働きかける力の３つが主に育まれていた。一人ひとり学んだ知識は共通していても、考えや思いは自分の経験に沿って作られていく。
・子どもたちの学校以外での生活に関わることも楽しいと感じた。
・子ども達が植物について教えてくれたり学校の状況を聞けたり私が新たに学ぶことが多くある

2.2.11. 大宜味村の学校を中心とした教育支援の研修教材化

大宜味小学校4年生 x 琉大教育学部
琉球大学体験を通したエネルギー教育

小学生だと座っているだけで60W電球と同じくらいのエネルギーを1秒間に消費します!!

学習者用デジタル教科書(4年社会科)Googleスライドやスプレッドシートにリンクが貼れます!!

夜の沖縄本島(大宜味はどこ?)

沖縄発電ランキング(エレクトリカルジャパン)から、発電所の種類と個数、出力数をみんなで調べてみました

電卓で頑張りました!!

日本の小学生は生活するために60Wの30～50倍のエネルギーを1秒間に消費しています!!

電気の作り方確認!
蒸気で作るんだね

資源エネルギー庁主催

かべ新聞コンテスト

学んだことを新聞にまとめてみよう!
まずはわかったこと、調べたことをメモしてみよう!!

プロジェクトの成果

エネルギー教育は理科の発電分野と社会科の産業分野(選択)にまたがる学習なので、教科横断的な学習プログラムによって充実させる必要がある。本プロジェクトではエネルギー教育を行う教員に必要な知識と学習者用デジタル教科書を利用した授業案をまとめ、研修動画として配信する予定である。

主なプロジェクト担当者

岡本牧子(技術教育専修)
*エネルギー教育

辻雄二（教育実践学専修）
学部学生（教育実践学）
*カフェテリア体験と風樹館見学

大宜味中学校2年生 x 琉大教育学部
エネルギー教育出前授業

手回し発電機

VS

ソーラーパネル

VS

コンセント

乾電池3個分

回路から製作したハンディファンを動かすのに必要なエネルギーと充電時間を実験で調べる

学習者用デジタル教科書や資源エネルギー庁の資料から、意見を集約、エネルギー政策について考えました

授業後の振り返り(一部抜粋)

・初めて装置みたいな実験道具を使ってやってみて、こうして違いや課題点を見つけていくんだとわかりました。また、2時間目に風力や水力などどれが一番電気を作っているかを調べて、この発電方法が一番多いんだということなどがわかり、学びになりました。
・初めて大学みたいな授業をやってわからないことや意味が理解できないことがほとんどで難しかった。だけど、これから使うことだと思うので慣れていくためにはこんな授業もあっていいと思いました。
・エネルギーを作るのはたくさんの方法、手段があるとわかりました。沖縄は風力発電をよく見るのでもっと勉強したいなと思いました。皆で考えてすすめていったから楽しかったです。
・手回し発電機で電気をつくるのは意外と大変だなと感じました。初めて知ったことはたくさんあって少し難しかったですが、授業は楽しかったです。

2.2.12. 連携協定を結ぶ市町村教育研究所（島尻・宮古島市・石垣市）研究員の共同ゼミ

取組B⑫

連携協定を結ぶ市町村教育研究所（島尻・宮古島市・石垣市）研究員の共同ゼミ

プロジェクトの実施スタッフ

・山口剛史（教育実践学専修）・大城譲次（島尻教育研究所所長）・新垣誠（島尻教育研究所主任指導主事）・勢理客美和子（島尻教育研究所指導主事）・平良善信（宮古島市教育研究所所長）・砂川睦紀（宮古島市教育研究所指導主事）・西原貴和子（石垣市教育研究所所長）・仲盛賢也（石垣市教育委員会指導係長）・新城哲史（石垣市教育委員会指導主事）

プロジェクトの概要とねらい

連携協定を結んでいる教育研究所において、長期研究員制度による研究が近年厳しい状況（それぞれの研究所で2人）となり、研究員が学び合うという点で課題が指摘されている。そのため、今回大学がコーディネートしてこれら研究所研究員６人をつなぐことで、長期研修をより有意義なものとするため共同ゼミを企画する。

実習／研修の概要（スケジュール）

月日	実施内容
研修前	それぞれの教育研究所とスケジュールの調整
12月15日(金)	島尻教育研究所にて第１回目交流会 ・研究員の研究計画交流会を実施、それぞれの研究計画について、指導主事・琉大教員がコメントし、研究のコンセプト、授業計画について交流した。
1月25日(木)	石垣市（真喜良小学校）にて２回目交流会 ・石垣市教育研究所研究員の検証授業（小学校３年国語）ならびに授業研究会を実施した。その後、研究の進捗状況について交流を行った。
1月31日(水)	宮古島市（鏡原中・教育研究所）にて３回目交流会 ・宮古島市教育研究所研究員の検証授業（中学１年英語）ならびに授業研究会・研究交流のセッションをを実施し、それぞれの研究のまとめにむけた交流を実施した。
研修後	交流会のまとめ、成果と課題の整理

・大学教員は、第１回目（上地完治（道徳）・山口）、２回目（山口）、３回目（津田敦子（英語））が参加した。

2.2.12. 連携協定を結ぶ市町村教育研究所（島尻・宮古島市・石垣市）研究員の共同ゼミ

実習／研修後の教職員ふりかえりより
研究員のふりかえりからみる共同の成果１

研究員の先生方から挙げられたのは、「仲間がいたことによる学びの深まり」である。「教科や指導について協議しあうことは、学校ではあまりできない」という声は、やはり学校の多忙化を表している。短期間とはいえ、学校現場を離れ、離れた地区の教員同士が研究協議でき、「教師が協働的学び」を実感したことが大きな成果である。

・同じ教科の研究員がいたことで、研究についての情報の共有ができた。テーマも似ていたことで、それぞれの考えが聞けたので視野が広がりました。
・教科や指導について協議し合うことは、学校ではあまりできないのでとても刺激になった。先輩や後輩関係なくこんな話が学校でも出来たら素敵だなと感じた。　（研究員ふりかえりより）

第1回目の交流の様子
参加者の声として
「第1回目はとても緊張したので，研究員同士あまり打ち解けることができなかった。交流前にZoomなどで顔合わせをしたほうが良かった。」
という声があった。

実習／研修後の教職員ふりかえりより
研究員のふりかえりからみる共同の成果１

・一番の効果は、研究員同士で同じ悩みや不安等、授業に対する思いや考えを共有したことで、自分の研究へのモチベーションが上がったことです。学校現場から離れ、落ち着いた環境のもとで研修に励んでいますが、離れた場所にいるからこそ自分の研究が本当にこれでいいのか、間違った方向に進んでいないか等の不安が大きくなっていました。そのような中、普段お会いすることのできない他地区の研究員の研究テーマや取り組み状況を聞けたことで、自分の研究について改善点や、逆に安心感も得られ.意欲が湧きました。　（研究員ふりかえりより）

第2回目の交流の様子
参加者からの声
「小学校の授業で、ＩCTを活用した授業を参観させていただいた。書くことが苦手な子がICTを使って集中して授業に取り組む姿があり、子ども達が意欲的に授業を進めていた。3年生の児童のICTの使うスキルは素晴らしかったです。」

2.2.12. 連携協定を結ぶ市町村教育研究所（島尻・宮古島市・石垣市）研究員の共同ゼミ

実習／研修後の教職員ふりかえりより
研究員のふりかえりからみる共同の成果２

研究員から出されたこととして、異校種間・地域を越えた学びが新たな視座を持つことにつながったという声があった。研究員は、幼稚園から中学校までの６人であった。それぞれの発達段階や教育課程の違いがあるが、その違いが学びにつながった。

・校種が異なる中でありましたが、共通していること「子どもの学びへの動機づけ」の大切さを実感しました。子ども自身が関心をもって取り組んでいくことが学びの楽しさへと繋がることを確信し、幼児も生徒においても動機づけの大切さを確認することができました。

・実践における課題の共有や改善点の検討などについて、各地区の研究員の先生方や指導主事の先生方の多面的・多角的な視点をもとに行うことができ、研究実践をする中で、とても大きなサポートとなりました。

・１回目の交流では、研究員の研究への思いを知れて、大変勉強になりました。研究のスタイルも各研究所で違っており、その点に関してもよい学びがありました。

（研究員ふりかえりより）

石垣での交流の際、参加者のお土産のパインアップル。
地域性のある一品である。

実習／研修後の教職員ふりかえりより
研究員のふりかえりからみる共同の成果２

最後に、「学ぶ楽しさ」を実感したという声があった。教師自身が「本物の学び」に出会うことで、これから「学び続ける教師」としての一歩を踏み出していることがうかがえる。

・はじめは期間限定の研究員生活だと考えていたのですが、研究の意欲が向上したので学校に戻っても個人研究を続けたい。この学びの楽しさを学校の職員にも伝えたいと思えた。

第３回目の交流の様子
セッションでは、研究所の枠を超えて、授業の失敗や改善策についても率直に語り合うことができた。

参加者からは
「ラウンドテーブル方式でのセッションでは、本音で話せて失敗談や今後の課題等を共有することができた」という声があがった。

2.2.12. 連携協定を結ぶ市町村教育研究所（島尻・宮古島市・石垣市）研究員の共同ゼミ

実習／研修後の教職員ふりかえりより
指導主事がみた共同ゼミの成果１

今回、ともに共同ゼミを運営してくださった研究所の先生方に振り返りをいただいた。そこには共同ゼミの成果がさまざまな形で表現されているため、特徴的な意見を紹介することにより成果を示したい。

【研究員の主体性を評価する声】

・研究員が主役で研究員同士の研究の交流（質疑・応答）等を通して、研究員それぞれが積極的に交流にかかわり、自己の学び方を身につけ自己教育力の育成に繋がっていた。

・石垣では、研究員の授業を参観させていただき、その後の研究会も互いの研究について情報交換できました。それ以上に休憩時間にも授業について語っている姿があり、対面で開催出来たことにより（設定された交流以外の時間も）自分の研究をアウトプットし、仲間から学び、自分の研究に生かすことができているのではないかと感じました。

2回、3回と研究交流を重ねる中で、より率直な学習観、教育観を語り合うことができるようになった。

実習／研修後の教職員ふりかえりより
指導主事がみた共同ゼミの成果１

・３教育研究所の交流で、当初不安もありましたが、実際に顔を合わせて自由に意見を述べたり、夢を語ったりすることで当初の不安は杞憂に終わりました。何よりもその地区で「研究したい」「教師力（指導力）を高めたい」と情熱あふれる先生方ですので、理論研や検証授業案など鋭い指摘があり、ナルホドと感心することが多かったです。３回の研究会では、お互いにリスペクトし自分事のように一緒に考え意見を交流できたことは最大の成果だったと思います。

このような研究員の学びには、他研究所の主事・琉大教員の価値づけがあったことが指摘された。

・本所の研究員が他所の研究員から学ぶだけではなく、自身の研究や授業実践を他所の研究員をはじめ、他所の指導主事や所長から価値づけられ、自信を高めることができた。

・島尻で行った検討会では、研究員同士研究について語り、他地区の所長、指導主事の皆さん、上地先生、山口先生からアドバイスいただき、それ以降の検証授業に生かすことが出来ました。

2.2.12. 連携協定を結ぶ市町村教育研究所（島尻・宮古島市・石垣市）研究員の共同ゼミ

実習／研修後の教職員ふりかえりより
研究員のふりかえりからみる共同の成果２

次に指導主事自身に大きな学びがあったことが、振り返りより明らかとなった。普段交流のない研究所同士の交流のため、それぞれの地域の特色や取り組みを意見交換することが、指導主事にとっても大きな学びとなったことがふりかえりから読み取れる。

【指導主事自身の研修改善につながる指摘】
・各地区の研究所の研修内容・方法に違いがあり、次年度の研修の見直しの参考になった。また、実際の現場を確認し情報交換等を通して、業務改善に向けた視点や教育講演会の講師選定についても意見交換が活発に出来た。
・地域を隔てても各研究所が目指すことは同じでありながらも、各研究所がそれぞれの方針に基づき、研修の企画・運営、研究員への支援の仕方に独自性をもって取り組んでいることを確認することができた。これは、交流・共同ゼミが開催されたからであり、今後の研修推進に大いに役に立った。
・指導主事としてもネットワークを広げる機会になりました。「石垣市教育委員会では教員採用試験対策講座を開いている」という話をきいたので、今回知り合った主導主事と連絡を取り、情報収集しているところです。他地区のステキな取り組みを真似て、今現場が必要としている講座や実践を取り入れていきたいです。

実習／研修後の教職員ふりかえりより
研究員のふりかえりからみる共同の成果２

【指導主事自身の研修改善につながる指摘】
・宮古島市においては、研究員を囲んでのグループセッションを通して、①授業感や授業づくりに対する思い、②研究所で学ぶことの意義、③これまでの実践の成果や課題、④今後の展望について、参加者全員での対話を通して、学びの多い機会となった。（①～④を話し合う機会が実は学校現場で少なくなっており、校内OJTやOJLの重要性が問われているのではと感じた）
・宮古島では、全員参加でグループセッションの意見交流を行い、他地区の先生方の情報や現状を知ることができました。津田先生から小学校で活用できる英語アプリの紹介もあり、できあがったら島尻（適応指導教室）でも活用したいです。
・市の担当主事にとっても、他市の研究所と意見交換することで、本市の研究所の在り方や研究の進め方など、参考になる事例に触れることができたことは効果が大きい。他市の学校訪問、授業参観をすることで、他市の教育状況（GIGAや学推、児童生徒の様子）などを知ることができ、本市の取り組みの参考になった。

2.2.12. 連携協定を結ぶ市町村教育研究所（島尻・宮古島市・石垣市）研究員の共同ゼミ

プロジェクトの成果

本プロジェクトの成果は、これまで紹介してきた通り、研究所の少人数での学びよりもよりも、教師自身の協働的な学びが生まれ、「良い授業とは」「子どもに深い学びのある授業とは」と主体的に追求する研究員の姿が見られ、研究が深まったことである。この学びの体験が「もっと学びたい」という意欲を生み出し、「学び続ける教師」として引き続き研究を続けていこうとしている。この主体性が引き出されるために、仲間との協働的学びが重要であった。学びとは本来協働的なものであることをそれぞれが実感したことも大きな成果である。

石垣市教育研究所の所長より、「R4中教審答申で『教師の学びの姿も子どもたちの学びの相似形である』とありました。個別最適な学びも協働的な学びのよさも実感できた研修会でした」**というコメントをいただいた。研究員、指導主事、琉大教員の協働によって、一人一人が「学び続ける教師」に向け育ちあう営みであった。**

第3回目の検証授業の様子
参加の声
「授業者の生徒に対する非常にポジティブな声かけや、生徒同士の温かい助け合いなど、支持的な空気に満ちた授業でした。」

プロジェクトの課題

課題は、事業の継続です。すべての方から次年度以降も継続すべきという声をいただいている。

・本事業は島嶼県である本県においてともて意味深い有意義な交流・共同ゼミだったと考えます。離島の研究員のみならず、各地区の研究員および所員にとっても大変学びが多いものであり、ぜひとも次年度以降も継続した交流・共同ゼミの実施についてともに考えて行けたらと思います。

・数年続けて欲しい。可能であれば次年度は別の教育研究所との交流会がもてると、研究所の研修内容をブラッシュアップし、さらに研究員の資質向上へ繋がると考える。

直接会っての交流が難しい島嶼地域において、各地と協働することにより単独の研究所ではできない学びを実現してきた。協働的な学びが教員の資質向上をもたらしたといえる。教育研究所、教育委員会、大学が協働し、この取り組みの継続、発展をすすめることが求められている。

第3回目の最後の集合写真
参加した主事の声
「他市の主事や研究所所長のお話を聞いたり、グループセッションに参加し、若い先生方と一緒に自分自身の教育観を語ることで、改めて、教育に関わる者としての心持や情熱を呼び覚ますことができました。」

2.2.13. 八重山地区校長研修会

取組B⑬

八重山地区校長研修会
―八重山教育事務所と琉球大学教育学部の連携による―

プロジェクトの実施スタッフ

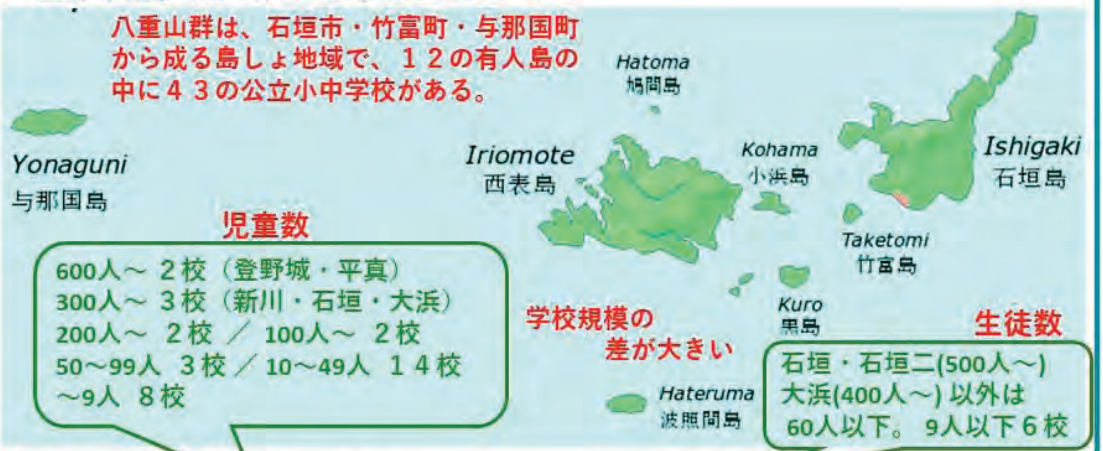
・萩野敦子（教育学部長）　・山口剛史（共同研究推進委員長）
・波平長真（八重山教育事務所指導班長）

プロジェクトの概要とねらい

「令和の日本型学校教育」を構築をめざして、児童生徒の学びと学校教員の学びの双方を「個別最適」で「協働的」なものにするために、これからの学校長にはマネジメント能力のみならずアセスメント能力・ファシリテーション力が求められる。そこで、八重山地区の公立小中学校長が一堂に会して主体的・対話的な研修を行い、互いに情報・意見を交換し合って学校長が抱える悩みを共有・解消する場を設定する。また、これを機に、今後ますます必要性が高まる管理職（学校長）研修の在り方について、教育行政と教員養成機関が協働しながら検討する機会ともする。

八重山地区の公立学校について

八重山群は、石垣市・竹富町・与那国町から成る島しょ地域で、１２の有人島の中に４３の公立小中学校がある。



児童数
600人～ ２校（登野城・平真）
300人～ ３校（新川・石垣・大浜）
200人～ ２校 ／ 100人～ ２校
50～99人 ３校 ／ 10～49人 １４校
～9人 ８校

学校規模の差が大きい

生徒数
石垣・石垣二(500人～)
大浜(400人～) 以外は
60人以下。 9人以下６校

	小学校	中学校	小中併置校
石垣市	吉原、新川、石垣、登野城、平真、大浜、川原、大本、宮良、白保、伊野田、明石、平久保、野底、八島、真喜良	石垣、石垣第二、大浜、白保、伊原間	富野、川平、崎枝、名蔵
竹富町	大原、古見、上原、白浜	大原、船浦	竹富、黒島、小浜、波照間、西表、船浮、鳩間
与那国町	与那国、久部良、比川	与那国、久良	

2.2.13. 八重山地区校長研修会

研修会（特にワークショップ）のねらい、企画者の思い

八重山でも
休職者が多い

現行の学習指導
要領や「令和の
日本型学校教育」
への対応も必須

コロナ禍や個人の
生活様式の重視で
職場の雰囲気も
ずいぶん変わった

正採用２校目…
初めての離島…
若手教員の課題

「いま校長先生が参加してよかったと思える研修」のあり方を巡り事前に数回にわたるリモートでの作戦会議を行った。

琉球大学教育学部

一方で彼らとの
世代ギャップ…

求められる
対応が多すぎて
管理職も
アップアップ

教職員の悩みは
そのまま管理職の
悩みでもある

受け身
じゃない
研修を…

八重山教育事務所

同じ立場にあるからこその
本音を気軽に出し合いながら
前向きに／元気になれる
ワークショップ型の研修を
やってみよう！

具体的に語れるほうがよいから
テーマは「若手教員との関わり方」で！

研修会のタイムスケジュール

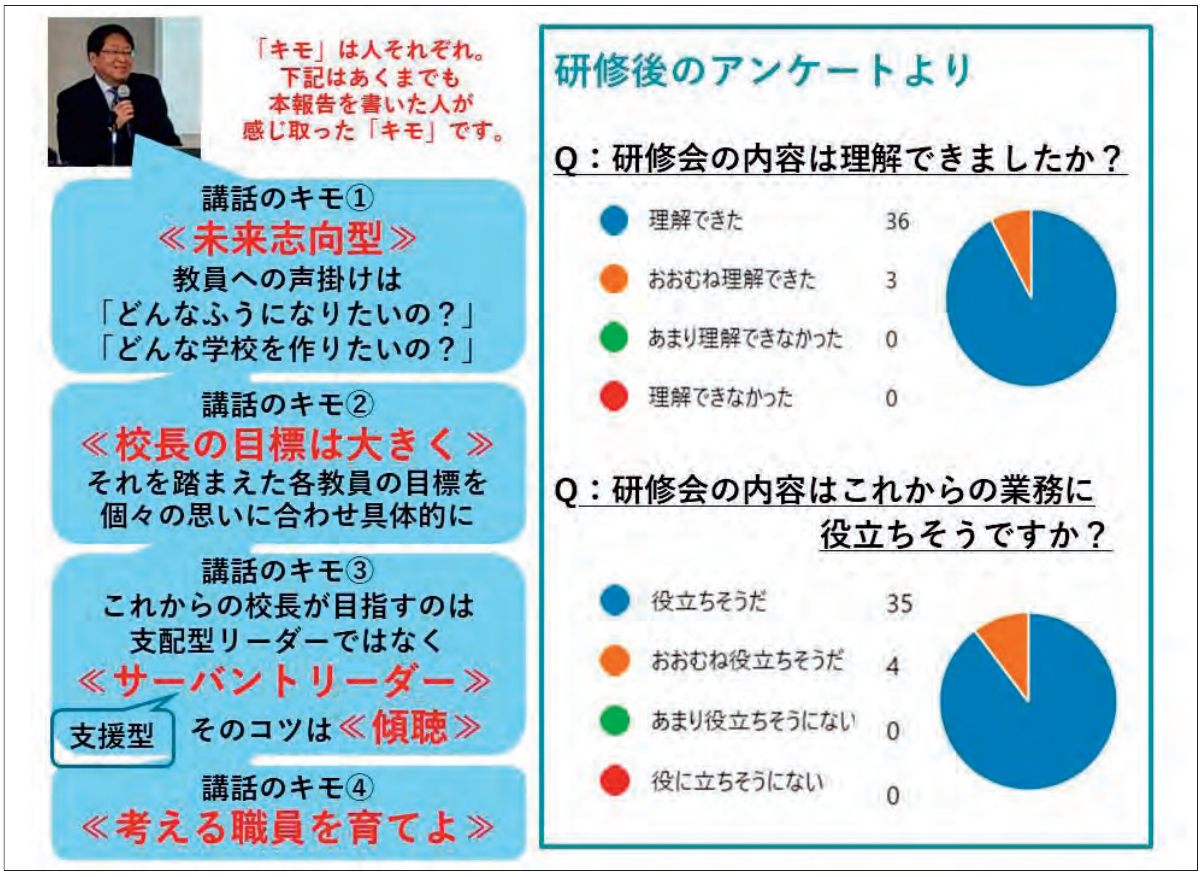
令和６年１月３０日（火）１３時３０分～１６時４５分

13:30～14:30　開会　所長あいさつ
　　次年度取組等の行政説明
14:30～15:30　講話
15:30～16:30　ワークショップと成果の共有
16:30～16:40　リフレクション
16:40～16:45　閉会

講師：黒木義成先生

（沖縄大学 副学長・人文学部教授）
（琉大教育学部附属小学校など県内学校教諭を経て
県教育委員会、教育事務所等の教育行政経験も豊富）

「目指す児童生徒像・学校像に向け、校長としていかに教職員を導いていくか」をベースに、ワークショップのテーマ「若手教員との関わり方」にも結びつくようなお話を・・・とお願いした。

八重山の校長先生方の
中にはかつての同僚も
何人かいて、当日は
楽しそうに旧交を
温めておられました。

2.2.13. 八重山地区校長研修会